國の小官士一人小猟にいでゝ此郷谷の澗中にまよひ入只管奥深く行ところに忽然として白髪の老人夫婦にあへり彼武士おもへらく是らなんぞ猴の年經て狒々といへるものなるべし唯一討にと鐵炮の筒先をさし向くるところかの老夫婦両手をあげて壮士よまてや放ち給ふな我們を妖怪獣のたぐひかと有げなれども其声正しく人間にして一向妖氣なし かの武士是と聞て大いに心を安んじ近く進みよて抑你們ハ何ものなれバ斯る幽栖の地に住居ぞやと問ければバ老人答て我もの們ハ乱るゝ世が憂にかゝる澗谷に隠れ栖ありといふ武士が曰く今天下泰平にして四民万歳をうたふ

その時なるに何となくて乱るゝといふも且いつの頃より這
ところに住ゐけるにや尋問ぞ老人が曰く我も何時のころ
と云事をしらず唯児島高徳が熊山に楯こもりける頃より
這處に入しゆゑに武士が曰く夫ハ後醍醐帝足利と合戦
のしれありといへば老人點頭て其の帝にや伯耆の船の上へ
遷幸ありし事などハ彷彿とおぼえなりといふ武士是を
聞て是いつはりならんと疑ひ夫より千般の事を尋問に近き
ころの事ハ何等をもしらず彼頃の事ハ何にまれ詳か
に答ふるにぞ漸々その偽言ならざるを悟ね山裡にふかく隠
木実をとりて食として在る故に仙術を得たるものなり

せがむ斯て彼武士ハ這老人に倡引れて奥ふかく分入つゝ奇
く物凄き山間を見ありきしかぞ此老人巌頭をつたひ
蘿をよぢりつゝ着て岩角をのぼり下りける事恰も猴
の如くありしや柳這處ハ岡府の長臣池田何がしの領
地なりければ彼武士皈りて領主に此よしを告たり領
主聞てもなはだ奇異の思ひをなし次の日彼武士を路聞と
して這洞中にわけ入て老人夫婦に面會しけるに老人ハ
唯足利蜂起の始末など語るの外別に談話なし斯て賫
し来りし酒さかなを出して老夫婦にも侑めぞ悟ん
是を食ひ是より後ハ四方のひとびと云傳へ聞つたへ日毎這

處より来て老夫婦にあひて談話しけるが好味食事
をあたへける老夫婦數百年木実ばかり食し居て長寿なり
しを當時人間の美味をひたすら食しける程に二十日
許過て竟に死したることあり

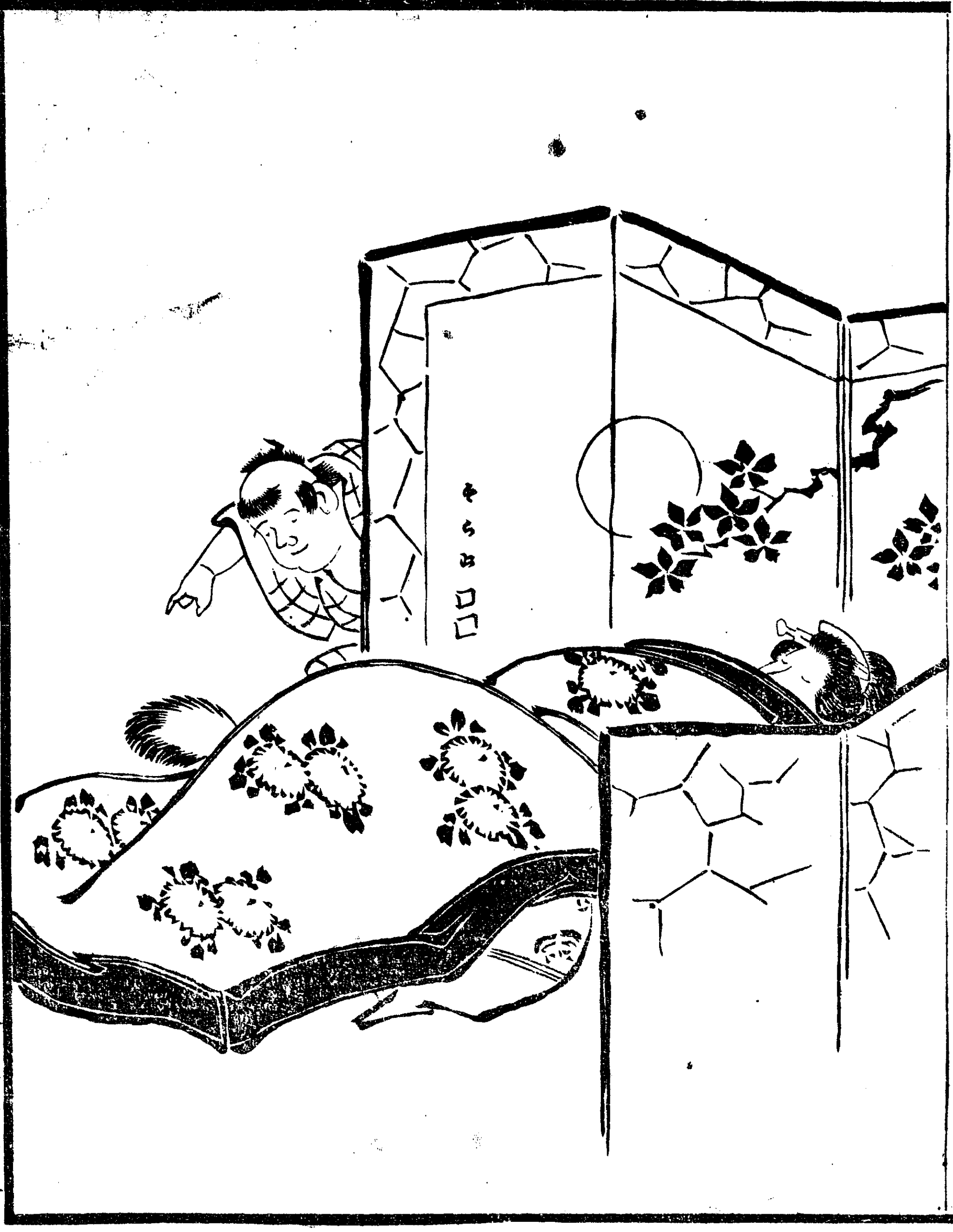
○栗山覺左衛門

常陸の國栗山といへる處に栗山覚左ゑもんと云る者あり四
代前の覚左ゑもん万般の藝にも拔いでたる者なりしが四
十のとし妻におくれ隻身夫にてくらしたるに次の年の
春の頃ある夕暮に一人の女来りて遠き國より迷ひ来りし
者親族の家を尋ねきつれども知れば天晩におよび難儀なり
万望今宵ひと夜やどらせ給らんやといふに覚左ゑもん聞て女
一人といひ天晩たる難儀なるべし若うらば當宵ハ我家に泊られ
よかしと云けれバ女ハ大いに悦びてやがて一室へ通しける覚左ゑもん
僕に分付夕飯を按排して女にあたへ近くよりて看に其容
皃うるはしく万般の談話にたくみなりと聞に殊の外怜利なり下総
の國はか者なるが幼き時父母にはなれ親族もなければ這國に
伯母のあるをたよりて参りけれども是もはやく去方まかりしバ
一向に便なき身にさすらふとて雨々と泣ゐるにぞ覚左ゑもん憐に
おもひ然事ならバ且少時我家に居て縫針のわざなどを勤め給へ
尋ねよと云ければ女悦び次の日より這家に居てはたらきけるが

殊の外かしこく何事もよく意着て働きけるにぞ覚さゑめん
天晴なる者におもひ竟には閨の伽となしにけるが頓て孃胎
して次の年一個の男子を産けるにぞ覚さゑめん愈愛くらし
けるが這子五歳になりけるとき母親昼寝して在けるを這
子母さん尾尾が出ましたと揺起しけれど母親おどろき
立地一隻の白狐となりて奥の室へ入しと竟に其去方を
しらず覚さゑめん這形勢を看ておどろき家の裡のこる
限なく尋ねけれども知ず先妻の白無垢を渠に與ゐつるが
其白むくに血をもて詩歌を書着ありけり詩ハ今忘たり
けり歌に

ことり子が跡をしたうてなきながら原にかくしく〳〵よ
と写着ありけるが其ところハ上総の國の地名にて女化が原とか
大いに因ある地名なり這白無垢ハ猶その家に傳へありとて
好事の人ハ尋ね行て看べし數代栗山覚さゑめんと呼て
狐の血統なり這叓公廳にも達して其頃こと〳〵く評判ありし
とぞ享保十八年の春の事なり次の年信田の葛の葉
狐の浄瑠璃をはじめて操り戯場大當りなりしとぞ
輯者曰く這物がたり予が兄雪粒中より當に是を看来
りし人の詞の侭に記ス但しかゝる事ハいくらもある
事と看て是に同き事を予倩々に見ける事ありし事あるが

たりしが記されし往古も猶是に似たる事あり三十代欽明天皇の御時美濃の國の人一婦を得て妻として子を生ぬ其家に犬あり時々婦を看てほゆ一日婦を吠んとしければ婦俄に化して野干と成て走り去ぬ其子多力にして善はしると水鏡にのせたり亦神社考に天文年中摂州垂井氏大蔵谷にて一人の美女を得て妻として子を生ぬ其妻鏡にむかひて粧ひを繕ふ子背より看てはしくろき呼で曰く鏡の中に狐ありと妻則ち出て狐となり鳴て去ぬ此子長壮てよく謡を諷て垂井源左衛門是なりとぞ抱朴子および玄中記等に百歳の狐化して美女となると



記せり按るに都て世の中の怪談奇事ハ狐狸猫の三物の所為にして其他なし東國にハ狐多く四國西國にハ狸おほし狸ハ人を誑惑ふこと少く人命を害し亦よく火を放つ狐ハ人を誑惑に其命を破らず火を放たず狸ハ術に鈍く狐ハ術すぐれり猫狸ハ憎むべし狐ハ悪むべからず仏説に咜枳尼天の狐あり鎮座本紀に三狐の神を祭る事ありて狐ハ尊むに足れり猫の事ハ角力夫小野川が傳にあれバ是を略りし近比寛政の頃なり江戸銀座二丁目西側に狸の卜者といふものありけり名ハ何とか云しが今ハ忘れたり

○狸の卜者

這者ハいさゝかの学文もありて會て語られしを十分拵りしさき處あり最一琦人にして旦暮の行状も人とハ大いに異なる處あり常に狸を好んで多く家に飼おき朝暮ともに愛せる處世の婦女子などが猫を愛するに異ならず牀室には狸の軸をかけ壁にハ狸の繪をおしかしこれはり着夏の浴衣に狸のもやうを染冬ハ狸の裘を躬にまとひ簷端易の招牌にも狸をゑがけり爰を以世人狸の卜者と呼なしけり然れども易ハよくも中らざりし或人の曰く先生狸を愛しなさるに合しても易の方あるく世にうとくして評判あし今まてし名人になり給へと云ければ卜者こたへて我易考下手なるを以て幸ひに長久して這嵬子

永くとゞまり斯畜生を飼なれて易からしむれどもおしかさバ忽ち
公廳に宜しからず廃業なすべきものと云たり最理なり

○蛇隠居

天明寛政の頃東武青山或御組屋敷のかたはらに武家の隠居
あり何某氏を武谷俗称を又三郎と云けり這人希有の癖
あり常に虫を飡ける事を好み朝夕前栽のうちを掃除し
蚯蚓竿むしけら虫蜘蛛蝶蛃蜴ひるぐくる都て何によらず
虫らしき者を見るや忽ち捉てあまさず飡ふ小さき虫ハ羽と足と
鬚とをむしりて其儘飡ふ蜘蛛なども其まゝ蚯蚓ハ毛を焼てくひ
蟾蜍ハ腹を割てはらわたを棄皮をさりて醤油をつけ焼く

飡けるを見るにや此家にハ虫といふものゝ一向になく客次にも蠅
一隻とぶ事なし皆這老人がくひ尽したるなり我家の前
栽ハさらなり両隣のせんざいまでも虫一隻も生ぜば万望らく
蚊と蚤をもとりて給らんやなど戯れいふ人も有たり虫多き
中にも第一の好味として憘び飡けるものハ蛇なり皮をそぎ
骨を去二三寸程づゝに斬て竹串にさし炙物にして食ふ予
其ころ此老人に蛇のかばやきを貰ひて飡たりけるにいと美味
なるものなりし外人ハ釣竿をさゝげて川狩にゆくなれ這老
人のミハ野山を経めぐりて蛇を數隻とり来り是を按排
して酒のさかなにて楽ミたる這人俗なから御家流の美筆にて壮き

頃しも弟子共も多く有しが斯る奇癖ある人なれバ竟に弟子も
こゝが来らず奈何なれバ然やうに虫を好むぞやと問ければ老
人答て世人獣の肉とさへ食ける者あり夫に合しては虫も大に
上品の者なりしと云けり寛政末のころ六十餘歳にて死去し同所
熊野横町高徳寺に葬る

○蛇喰八兵衛

常陸の國竜ケ嵜に山田屋何がしの家の下僕八兵衛といふ者
ありたり性悪食を事とし常に煙草をもて事大太異なり朝
より夜に寐るまで烟管を噛つけにてそらなつの業となしける
田家の下僕なれバ蕈芝なども多く把ありけるに故ありし火の過

失もあらんかと主人もなか〳〵放心して八兵衛ニ業を勤る間ハ
烟草をのむべからずと禁めたり八兵衛好む処のなれども止め
られ大いに困じ火さへ用ひずば宜しかるべしと云て烟艸を
生にて咀喰しけるとぞ其外醤油を一升のミ番椒を一斤くらひ
蟾蜍とすら焼かずして喰ひなどしけるにぞ衆人はなはだ驚き
たり一日同じ村の荘官より山田屋へ使をもつて下僕八兵
衛を些しの間借たき度よしを申越しけり奈何なる事
にもあれやとて且八兵衛を呼て斯と知せ荘官の家へゆかしむ
しけり斯て荘官八兵衛を呼て語て曰く近頃我家の前栽
のうちへ両頭の蛇きたりて徘徊せるを看人は遠からず死る

といふ事昔より云傳て人の怕る事異朝の叔敖が古事にても
知べし蛇に執心ありし者あつて殺しても念を残し其人に付
なるといへり況や両頭の蛇におゐてをや爰をもて我思ふ
かの蛇をひとしくかぎり形も残らずば念とのこれる処あるべし依
何とぞ彼蛇をとらへてくれよ然らば其酬謝に二十金を与へ
与べしといひけれバ八兵衛答て命の如く両頭の蛇を看ものは
遠からず死と聞傳へさぶらふ看てさへ死なじとの毒蛇にさぶらへ
ば喰ひなば極て死侍らん小僕元来妻なし子なし死なばそれまでて
歎くものなし齢も当六十ちかし命も惜からねば命
に任せその蛇を喰ひてみんとぞ然し我もし蛇を喰ても猶生て

あらバ酬謝ニハ好よきなれバ若死さへあらバ四五金の謝禮で
なくしやといふ荘官聞て夫ハ係言ちがひニハ有ぬや倘死
あバ酬謝ニ與よかバ生ながら欲しといふニハあらバや八兵衛
頭を打ふりて否々然ハあらバ小僕生てあらん程ハ當の主
家ニて生涯やしなひまゐる故ニ一銭の要用もなし死さる
らバ葬礼ある程の物を給ハるべしといふ荘官聞て実理
あり奈何も做べし万望ハ彼蛇をひく呉よかし夫ある八兵
衛點頭いなくもあれ其蛇いバ侍らず疾知せるべし
小僕參りて啗ひてらんと云て當日ハ家ニ歸りける四
五日を經て荘官よりむかへの人来りけるニぞ八兵衛急ぎ荘